

**世界の人びとのための J I C A 基金活用事業
終了時活動報告書 (2024 年度採択案件)**

1. 業務の概要	
(1) 案件名	ガーナ共和国セイチェレ村「村おこし」事業 2024～ジェンダーからのアプローチ～
(2) 実施団体名	国際 NGO ViVID
(3) 実施期間	2024 年 12 月 02 日～2025 年 12 月 1 日
(4) 実施国	ガーナ共和国
(5) 活動地域	アシャンティ州クマウ・セイチェレ地方セイチェレ村
(6) 活動概要	
①活動の背景：	
<p>1. ガーナの国情および日本政府・JICA の基本方針との整合性 ガーナは西アフリカ地域の民主主義を牽引する国として国際的評価を高めている一方、地方部では依然として保健・教育・ジェンダーに関連する社会課題が深刻です。特に地方開発における UHC（ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ）の実現は進行中であり、ガーナ政府および JICA の支援にもかかわらず課題解決には至っていません。これは開発課題の複合化、開発協力機関の資源制約、多様なアクターの連携不足といった構造的要因によるものです。この状況を踏まえて JICA は「ジェンダー平等と女性のエンパワーメント」を含む JICA グローバルアジェンダを掲げ、多様な主体との協働により開発インパクトを最大化する方針を打ち出しています。本提案は、政府要請のみならず、NGO が自発的に現場から課題を発見し、知見を共有し、事業を共創していくモデルであり、JICA グローバルアジェンダの趣旨と合致しています。</p>	
<p>2. 対象地域「セイチェレ村 (Sekyere community)」の現状 ViVID が支援するセイチェレ村は、人口約 5,000 人の小規模農村で、住民の 8 割が自給自足的農業に従事しています。貧困率が高く収入源が限られるため、特にコロナ禍では日雇い労働者が収入を失い、生活の不安定化が顕著に進行しました。このような脆弱性の高い社会構造の中で、教育・保健・ジェンダーに関する問題が複合的に発生しています。</p>	
<p>3. アンケート／インタビュー調査による社会課題の可視化 ViVID は 2020 年より住民アンケート・インタビューを実施し、以下の課題が明らかになりました。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 日雇い労働者の慢性的貧困 - 子どものアルコール・薬物乱用 - 生理用品不足による女子生徒の欠席・中退 - 性知識不足による若年妊娠 - 家庭の教育理解不足・生活困窮 - 学校環境や農業技術の不足 - 村内に根強く残るジェンダーバイアス <p>これらは単発ではなく複合的な貧困の連鎖として相互に悪影響を及ぼしていました。特にジェンダ</p>	

一と性に関する課題は、教育機会の喪失・職業選択肢の狭小化を招き、貧困の固定化を促していることが判明しました。

4. 「村おこし」事業の全体計画におけるジェンダー課題の位置づけ

複合的な課題に対処するため、ViVIDは住民と共に「農業」「教育」「ジェンダー」の3分野からなる段階的な村おこし事業を計画し、JICA および民間助成を得ながら継続的に実施してきました。その中でもジェンダー分野は、教育課題・貧困・若年妊娠が密接に関係していることから、村の構造的課題を解決する「基盤領域」と位置づけられています。

5. 性教育事業を実施する必然性

アンケート結果、学校現場の声、住民ヒアリングから、以下の深刻な実態が確認されました。

- 女子生徒が生理用品を購入できず授業を欠席
- 若年妊娠が多く、進学・就労が困難に
- 性知識不足による性感染症や望まない妊娠
- 貧困から売春に従事する女性が存在
- 男子生徒が生理を茶化すなど、ジェンダー理解の欠如

これらの問題は、個人の努力では解決不可能な構造的課題であり、地域全体で包括的なアプローチを行う必要がありました。

また、性教育は単に知識伝達ではなく、

- 教育継続
- 女子の進級率向上
- 若年妊娠防止
- 職業選択の幅の拡大
- 貧困の連鎖からの脱却

につながる“貧困対策としての教育介入”であると考えられました。

6. これまでの性教育事業の成果と住民の変化

ViVIDは2021-2022年度に以下を実施し、一定の成果を確認しました。

- 包括的性教育の全校実施（PPAG協力による専門家講習）
- VTAS（ViVID Teacher Association）を通じた教員研修と授業展開
- 男子生徒も含めた布ナプキン制作実習
- 布ナプキンの配布による欠席率の改善

現場からは下記のようなポジティブな変化が報告されています。

- 女子生徒の生理関連欠席が減少
- 男子生徒のジェンダー理解が進み、からかい行動が減少
- 男子が家庭で妹のナプキンを縫うなど、家庭文化にも影響
- 生徒が自作できる布ナプキンにより、生理と教育の機会損失が改善

これらの変化から、**性教育+実践的支援（布ナプキン製作）が地域の価値観と行動変容を生むこと**が明らかとなりました。

②活動の目標：

「村おこし」事業の最上位の目的は、貧困問題および、それに起因するさまざまな社会課題の解決にあります。そのために、村の有識者や住民への聞き取り調査をもとに、優先度が最も高かった「農業」「教育」「ジェンダー」の課題に重点的に取り組みます。そして、団体のスローガンである Colorful Life For All を Sekyere community（セイチェレ）でも実現し、住民一人ひとりが自分

らしい生活を送れるよう、貧困からの脱却を目指します。

本提案書で提示するジェンダー事業では、理論と実践を組み合わせた包括的な性教育を通じて、Sekyere community のすべての女性のエンパワーメントを図り、以下のKPI 目標達成を目指します。

目的

1-1: 全学校の全クラスに対する性教育座学実施率 100%、および、全学校の小学校 4 年生以上の全クラスに対する実習実施率 100%

1-2: 「生理の経血により学校を休む頻度が以前より減った」と回答する生徒が「生理の経血により学校を休む頻度が以前より増えた」と回答する生徒より多い人数を占める（生理用ナプキンを利用する女子が対象）

目的

2-1: 一般住民向けに性教育座学と実習をそれぞれ 5 回ずつ実施する

目的

3-1: 学生たちへの布ナプキン制作に必要な裁縫セットの配布率 100%

3-2: 家庭で性に関して考える機会を得られた、または、両親と布ナプキンを制作する機会を持つことのできた学生の割合が全体の過半数を占める（生理用ナプキンを作った後に生徒と保護者が協力して記入する作業を提供し、性教育に関連することについてさらに考える機会を設けることを促す。この用紙は回収し目的評価に用いる）

全対象者

ViVID の現地スタッフ、性教育専門 NGO コンサルタント、VTAS の先生達にインタビューを行ない、座学・実技についてどう感じるか、学生や保護者・コミュニティに意識の変化はみられるか、今後改善が必要な点について調査する。

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

本事業では、Volunteer Teachers Association of Sekyere (VTAS) が中心となり、現地性教育 NGO である Captain Centre of Education の Mr. George Atsu と連携して、Sekyere 村の幼稚園・小学校・中学校・高校における、年齢に応じた、かつ文化的に配慮した性教育を実施するための体制整備を行いました。

具体的には、2025 年 7 月 4 日から 7 月 6 日までの 3 日間にわたり、教員の指導力強化を目的とした包括的研修を実施し、「Understanding Gender」「Skills for Health and Well-Being」「Sexuality and Sexual Behaviour」の 3 テーマを軸に学習を行いました。

さらに、研修内容および教材は International Technical Guidelines on Sexuality Education、Ghana Education Service (GES) の基準、ガーナの文化規範 (customs/values) との整合性を確認しながら整備し、教材は Captain Centre of Education が作成し、ガーナ国内の承認ガイドラインへの適合がレビューされました。

加えて、授業計画 (lesson plans) の作成、デモ授業、事前・事後テスト (pre/post questionnaires) の設計、セミナー実施日程の調整、GES および学校長ならびに教会当局からの許

可取得を段階的に進め、現場実装に必要な運用条件を整えました。

本事業の実施体制として、ViVID スタッフは Addo Emmanuel、Akosua Asantewaa、Ebenezer Addo が参画し、VTAS の教員メンバーとして、James Moro (Savior)、Alex Afriyie (Sekyere Kusi)、Betty Mensah (Methodist)、Gladys Kumi (D/A)、Agyei Daniel (Methodist)、Agyeman Francis (D/A)、Kyei Rapheal (Savior)、**Samuel Owusu (Marys Home academy)**が活動しました。

運営面では、2025年3月19日に「Session 1: Project Scope」を開催し、ファシリテーターを国際 NGO ViVID 代表の蔵田克己が務めました。この会議では、学事日程が逼迫していること、セミナー時間が長くなり得ること、その結果として学生のモチベーションが下がりやすいこと、使い捨てナプキン志向が強いこと、教会側から割ける時間が限られることといった現場課題を整理した上で、座学は基礎教育校（幼稚園・小学校・中学校）に加えて SHS も含む全校で実施し、実技は SHS 学生および保護者を中心に実施する方針を確定しました。

また、全学生に sanitary pad kits を提供すること、実技（縫製）は Asantewaa (ViVID Ghana 所属) および訓練済み仕立て屋が担うことを決定し、あわせて使い捨てナプキンも併用すること、休暇中実施を検討すること、休暇中実施の場合は食事提供を行うことが推奨事項として整理されました。

続く「Session 2: Project Planning and Scheduling」は 2025年4月23日、6月6日、6月27日の3日程で実施され、各校の教員（VTAS 所属）が自校で座学を担当し、実技も補助するという役割分担を定めました。セミナー時間は1回あたり1時間30分に制限し、質問票は10名を1グループとして運用すること、文化規範への敬意として学校へ物品を提供すること、専門研修は Captain Centre for Education が担うことを運用ルールとして整備しました。

教材面では、2025年7月4日から7月6日に「Session 3: Review of Seminar Materials」を開催し、Mr. Atsu George (Captain Centre for Education) がファシリテーターを務め、Key Concepts 3, 5, 7（「Understanding Gender」「Skills for Health and Well-being」「Sexuality and Sexual Behaviour」）を対象に、ユネスコの国際 CSE ガイドライン、ガーナの文化的価値観、国家ガイドラインに沿う形で教材をレビューしました。この過程で、年齢に応じた言葉と教材を用いること、遊び・ドラマ・双方向活動を取り入れること、教員が時間管理を徹底し経験共有を促すことを決定しました。

さらに、2025年7月11日から7月16日の「Session 4: Lesson Plan Development」では、クラスレベルごとに教員をグルーピングして授業計画を統合し、事前・事後テストを含めた総時間を1時間30分とする標準化を行いました。2025年7月25日から8月9日の「Session 5: Questionnaire Development」では、事前10問・事後10問を最大とし、3つのキー概念をカバーし、簡潔かつ年齢に適合し、学習分類（taxonomies）に整合した質問票を作成しました。

学校向けセミナーは、2025年10月から11月にかけて、Methodist School、D/A Basic School、Saviour School、Sekyere Kusi Senior High School の4校で実施しました。国際 CSE ガイドラインに則り、幼稚園年中・年長生・小学1年・2年・3年を Age Group1、小学4年・5年・6年を Age Group2、中学生を Age Group3、高校生と一般住民を Age Group4 とし、過去の事業で実施していなかった Key Concepts 3, 5, 7 のテーマを4 Age Group 毎に年齢に合わせて深度を変えて授業を行うことにしました。

Methodist School では、校長の許可のもと、1回1時間30分で実施し、学校スケジュールに応じて午前9:00-10:30 または午後1:00-2:30 の枠で運用しました。実施は2日間で行い、年齢別にグループ分けした上で、人数が多い場合には2クラスに分割して、pre-test による基礎理解の確認、対話

型手法による授業「Growing Up」の実施、post-testによる学習効果の確認までを一連で実施しました。その結果、過去のセミナーと比較して参加が改善し、生徒の**好奇心**や**自信**、**発言意欲**が高まったことが観察されました。一方で、ViVIDから物品が提供されることを期待する生徒が一部存在し、生徒の軽微な注意散漫が生じた点、セミナーは休憩時間や自由時間に一部干渉した点が課題として挙げられました。

D/A Basic Schoolでも、1回1時間30分の許可を得て、2日間の実施で授業と評価を完結させました。年齢別グルーピングを行い、pre-testで既有知識を確認したうえで、**ジェンダー理解**、**個人衛生**、**思春期の変化**を中心テーマとして、グループ討議、質疑応答、シナリオ学習を組み合わせた参加型授業を実施し、post-testで理解度の変化を測定しました。観察として、生徒は自身の身体や**ウェルビーイング**への理解に強い関心を示し、教員も協力的で円滑な運営が実現しましたが、教室スペースが限られておりグルーピングが難しかった点、センシティブな話題で恥ずかしさを示す生徒がいた点が課題としてあげられます。

Saviour Schoolでは、1回1時間30分を2日連続で実施し、授業と評価（pre/post）までを完結させました。内容は**性行動**、**意思決定スキル**、**健康とウェルビーイング**を扱い、ロールプレイやガイド付き討議などの双方向手法を中心に進めました。その結果、生徒は思春期や**自己防衛**に関するテーマでも対話に参加しやすくなり、議論への自信が高まったこと、学校側の運営支援により学習環境が確保されたことが記録されました。一方で、物品提供を期待する生徒が一部存在した点、時間制約により議論が深まりきらない場面があった点が課題として残りました。

Sekyere Kusi Senior High Schoolでは、学校の許可として毎日1時間30分の実施枠を得たうえで、座学と実技を両立するために3日間のプログラムとして実施しました。ここでは、年齢に応じたグルーピングのもと、**思春期**、**月経衛生**、**生殖保健**に関する基礎理解を把握するpre-testを行い、**性**、**健康とウェルビーイング**、**ジェンダー理解**の授業を双方向手法で実施しました。

加えて、**再利用可能な生理用布ナプキン**を縫製する**実技**を組み込み、材料選定、型取り、縫製、**衛生的使用方法**までをデモンストレーションとして提示しました。さらに、保護者または後見人と一緒に取り組むことを前提とした**持ち帰り質問票**を配布し、家庭内で縫製練習を継続するよう促すことで、家庭内対話と家族関与を強化しました。観察結果として、実技導入により参加意欲が大きく向上し、多くの生徒が「**有用で費用対効果の高いスキル**」を学べたと評価したこと、教員が座学・実技の双方で**監督**を強化したこと、質問票の提出状況やフィードバックを通じて**保護者関与**が強いことが確認されました。課題としては、縫製資材が限られていたため道具を生徒間同士で共有せざるを得ず進行速度が低下した点、技能差によって完成に時間を要する生徒がいた点、当初は月経衛生の話題に躊躇する保護者が一部いたものの説明後に参加した点が記録されています。

一般住民（保護者等）向け**座学セミナー**は、Christ Apostolic Church (CAC)でMr. Alex Afriyieと、Saviour ChurchでMr. Kyei Raphaelがファシリテーターを務めました。セミナーは円滑に実施され、参加者の関与度も高かったと記録されています。内容としては、保護者の側が子どもの発達および**生殖保健**上のニーズを理解し、子どもの視点を尊重しながら、意思決定を支える**ガイダンス**力を高めることを目的としました。あわせて、**月経衛生マネジメント**の実務課題として、**再利用可能な生理用品**の利点と作成スキルを紹介し、使い捨て製品を毎月購入する**経済負担**の軽減と、**衛生的で持続可能な実践**の促進を狙いました。

性教育実技（生理衛生：布ナプキン作成）は、3日間で実施し、Ms. Bevelyn Asantewaa Akosuaがファシリテーターを務めました。本実技は、**理論学習のみでは不十分である**という問題意識に基づき、特に毎月の使い捨てナプキン購入が難しい学生を中心に、**再利用可能な生理用品**を継続使用できる状態まで**技能移転**することを目的に設計しました。実技では、布ナプキンの**内側パーツ**を手縫

いで作成する工程から開始し、綿布、吸水用コットンタオル、コットンライニング、糸、針といった資材を提供して、縫製と織りの練習を実施しました。さらに、保護者が子どもと同席して技能を獲得・強化する回も設定し、家庭内での継続練習を促すことで、世帯単位での持続可能な月経衛生実践につなげました。

(2) 実施成果：

本事業により、2025年10月から11月にかけて4校や一般向けに行われた性教育セミナーは滞りなく実施されました。生徒のジェンダー、セクシュアリティ、健康、責任ある行動に関する理解が向上したと総括できます。特に Sekyere Kusi Senior High School で実技を組み込んだことにより、プログラムがより包括的となりました。

実技（布ナプキン作成）については、学生および保護者の双方で、知識、自己効力感、実践スキルの向上が確認され、尊厳ある月経衛生を安全かつ費用対効果高く、自立的に管理できる状態への前進が見られました。加えて、親子協働が強まり、再利用可能な生理用品に対するコミュニティ受容性が高まったことが記録されています。さらに、月経時に必要資材へアクセスできないことが学業継続の阻害要因になりにくくなることから、女子生徒の欠席（absenteeism）低減に寄与することが期待されます。

定量的評価として、一般住民（保護者等）向け実技に関する質問票では、保護者71名のうち「自宅で子どもと一緒にパッドを作った」と回答した者が50名（70.4%）であり、「作っていない」は21名（29.6%）でした。また「学校で性教育を教えることに賛成」と回答した者は66名（93%）で、「賛成しない」は5名（7%）でした。さらに「家庭で子どもに適切な性教育を教えている」については、71名全員（100%）が「教えている」と回答しました。

学生側（計95名）の回答では、「月経（menstruation）を定義できる」と回答した者は83名（87%）で、定義できない者は12名（13%）でした。「パッドの用途を説明できる」と回答した者は91名（95%）で、無回答等は4名（5%）でした。また「学校で学んだことを保護者に共有した」では「共有した」が76名（80%）、「共有していない」が19名（20%）でした。

質的評価としては、事後インタビューを通じて、学生代表の Ama Kwakye、Afia Fofia、Danso Mosis、Rita Amonu、保護者代表の Vida Addai、Fred Osei、教員／ファシリテーターの James Moro、Agyei Daniel、Gladys Kumi からフィードバックを得ました。インタビューでは、性教育が生徒に権利理解、自己防衛、自己理解を促し、行動や態度に良い影響を与える可能性が繰り返し言及されました。また、実技（再利用可能ナプキン）の導入は、毎月の使い捨て製品購入が難しい世帯の経済負担を減らし、月経時の欠席予防に繋がり得るという評価が共有されています。

(3) 得られた教訓など：

本事業から得られた教訓として第一に、座学だけでなく実技を組み込むことで、学習の納得感と参加意欲が大きく高まり、家庭内関与まで含めた波及が起こりやすい点が明らかになりました。特に Sekyere Kusi Senior High School では、実技導入によって生徒の関与が顕著に高まり、質問票とフィードバックを通じて保護者関与が強いことも確認されています。

第二に、親子で取り組む設計は、技能移転と家庭内対話を促進し、行動変容の下支えになることが、定量データ（家庭で一緒に作成した回答が70.4%）からも裏付けられました。

第三に、再利用可能な生理用品については、費用負担の軽減や欠席予防といった利点が強く評価される一方で、衛生面（洗浄・乾燥・保管）や文化的受容性に関する懸念が存在し、誤解を解きながら継続的に指導・監督を行う重要性が示されました。Rita Amonu は衛生的運用への不安を表明し、

Agyei Daniel と Gladys Kumi も、十分なガイダンスがない場合や文化的抵抗がある場合には誤用・拒否につながり得ることを指摘しており、**継続教育と誤解対応の必要性**が明確になっています。

第四に、実技実施のボトルネックとして資材不足が顕在化しました。 Sekyere Kusi Senior High School では縫製道具が限られていたため共有が発生して**進行速度が低下**し、技能差により**完成まで追加時間**が必要な生徒もいました。また、教員側からは Gladys Kumi を中心に、デモやハンズオンを支える**材料・資源の追加供給**が要望され、資材供給量が**実技の学習効果と自信形成**に直結することが確認されました。

第五に、「物品がもらえる」という期待が授業への集中を妨げる場面が複数校で観察されており、**実施目的の事前説明と期待値調整**が不可欠であることが教訓として整理されました。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針：

当事業を通して、Sekyere 村の全学校の全クラス、ならびに Age Group 1~4 の全ての男子生徒・女子生徒に対して、学校の有志教員グループである VTAS と共に、**国際 CSE ガイダンス (International CSE Guidance) の Key Concept 1~8** を用いて性教育セミナーを実施したことになります。セイチェレ村の周辺村でも同様の事業を行なっていきます。

しかしながら、今後もセイチェレ村の学校側と協議し、**議論の深掘りと実技の充実**を両立できるよう、**セミナー時間の拡張**を検討します。あわせて、**再利用可能なプキン縫製**のような実技では、**材料と道具の供給量を増やし**、共有による遅延を減らして**完成率と学習効率**を高めめます。加えて、**親子活動をより構造化し**、家庭内での**復習や実践**が継続されるよう、**保護者関与**を強めます。

さらに、**物品配布への期待**を抑え、セミナーの目的を明確に周知することで、学習環境の質を守ります。**スペースが限られる学校では、会場変更や分割実施**などの運営工夫を事前に織り込みます。最後に、一定期間後の**フォローアップ評価**を導入し、知識や行動変容の**持続性**を測定して、**改善サイクル**を回す方針です。

来年以降は、ViVID の日本人スタッフや性教育専門家を交えながら、**国際 CSE ガイダンス**と見比べつつ、これまで VTAS が制作してきた**性教育教材の質の向上と内容の充実**を図ります。その上で、**VTAS 所属の教員および現地の性教育専門機関**と議論を重ね、教材および授業の**質の向上**を継続的にを行い、Sekyere 村にとどまらず**近隣コミュニティ**も含めて、**セミナー事業のスケールアップ**を進めます。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

活動中の一エピソードとして、印象的だった内容は、セイチェレ村に蔵田が訪問し、VTAS の教師たちの前で当事業の目的・内容・期待される効果に関してプレゼンテーションを行った後、性教育セミナーの「開催方法」をめぐって、現場の先生方から次々と具体的な提案が出たことです。昨年は授業時間内で実施した結果、扱う内容量が多く時間内に収まらない場面があったため、先生から「放課後なら次の授業を気にせず深く話せるのではないか」という意見が出ました。一方で、放課後は子どもがお腹を空かせて集中力が落ちる懸念があり、「軽食を出せないか」という提案もありましたが、助成金予算の制約で難しいことを共有しました。さらに別の先生からは「土曜日に教会で実施すれば時間を確保できる」という案も出ましたが、出席率が下がれば“全ての子どもに届ける”という事業の目的が損なわれるため、慎重に検討する必要があると議論になりました。こうしたやり取りを通じて、先生方のモチベーションの高さと、より良い形で子どもたちに届けようとする当事者意識が強く感じられ、事業のニーズの高さを改めて実感する機会となりました。

(2) 活動の写真



当団体代表蔵田が VTAS の教師向けに当事業のオリエンテーションを実施している様子



定期的集まって性教育セミナーの準備を行ってくれた VTAS の教師たちのグループ写真



(左) Sekyere Methodist Primary School の1年生で行われた性教育座学セミナー
(右) Sekyere Savior Primary School の1年生で行われた性教育座学セミナー



学生向け布ナプキン裁縫セミナー



(左) 性教育セミナー授業内容習得評価



(右) 一般住民向け布ナプキン裁縫セミナー

- (3) JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点
- ・ JICA の公的機関としての信頼性が、団体の信用力向上に直結した点
- JICA 事業としての実績が対外的な信用の裏付けとなり、行政・学校・企業・他助成先との協議が進めやすくなった。